



HCAP 東京大学運営委員会 東京カンファレンス 2012 報告書

本報告書について

この報告書では、ハーバード大学とアジア諸国の大学の学生団体が運営する HCAP (Harvard College in Asia Program) の短期交流プログラムである、ハーバードカンファレンスとアジア諸国のカンファレンスのうち、2012 年に HCAP 東京大学運営委員会 6 期が企画・運営を行った後者のプログラムである東京カンファレンスについて報告する。

代表挨拶

2011 年度 6 月に結成された HCAP 東京大学運営委員会 6 期は 2012 年 3 月 10 日から 18 日にかけて 9 ヶ月に渡る活動の集大成である東京カンファレンス 2012 を開き、無事終えることができました。ここに至ることができたのも皆様のご支援、ご協力あってこそだと強く感じております。誠にありがとうございました。深く感謝の意を申し上げ、この冊子において私達の活動を報告致します。

3 月 10 日、まさかの半分のハーバード生が 1 日遅れるというハプニングから始まった東京カンファレンスは、メンバーの発熱やロストバゲッジ、急なハーバード生の要求など様々なハプニングに見舞われながらも、最後はハーバード生から「最高の一週間だった」、「今までの経験で最も印象に残るものだった」などのコメントをもらい、空港にて涙で別れるといった状況で終わりました。空港でハーバード生全員が見えなくなった後、誰もが少しの間沈黙し、別れをかみ締めていたのを覚えています。

ここに至るまで長きに渡る苦勞、笑い、涙がありました。お互いの個性がむき出しのまま出会った顔合わせから始まり、蒸し暑い部屋で理念や自分達のやりたいことについて語りあい、必死にアプリケーションを作りあげた夏。駒場祭に講演会をやるかどうかでもめたあげく、やる事が決定してから皆で全力で取り組んだ講演会。カンファレンスの大企画を巡って東北への熱い思いを泣く泣く断念した話し合い。先輩との関わりをきっかけに起きたハーバードカンファレンス前の本音での語り合い。不況の中苦勞して探し当てた渉外先。英語に苦勞しながらも挑戦していったハーバードカンファレンス。直前のほぼ毎日計画を修正しながら細かい部分を詰めていく準備作業。そして待ちに待った本番。

私たちはこの 1 年、たくさんのものを得ました。それは人としての成長、リーダーシップをとるものとしての成長、国を超えた視点を得たこと、そして何よりも信頼できる頼もしい友人達。僕らが今後やっていくことはこれらの成長や得たものを自分達の将来に大きく活かし社会にも貢献していくことでしょう。このプログラムが終わってしまうことに一抹の寂しさを感じつつも同時に未来への新しい出発に期待で胸が膨らみます。

改めてこの HCAP というプログラム、そして成長を促してくださった先輩方、プログラムを成り立たせるのに必要な資金を援助してくださった企業の方々、派遣メンバーへの援助や施設、場所を貸してくださった大学関係者の方々、その他プログラム運営に関わって頂いた全ての方々に厚く御礼を申し上げます。非常に貴重で充実した 1 年間、そして最高の一週間をありがとうございました。

HCAP がより良い成長の場となり続けることを願って。

HCAP 東京大学運営委員会 6 期代表 三澤晃人

目次

本報告書について	1
代表挨拶	1
東京カンファレンス 2012 とは	2
カンファレンス日程	2
各プログラム説明	2~11
3月10日	2
3月11日	3
3月12日	4
3月13日	5
3月14日	6
3月15日	7
3月16日	8
3月17日	9
3月18日	10
カンファレンス総括	11
HCAP 東京カンファレンス 2012 会計報告	別資料

カンファレンス日程

- 1日目(10日)
- ・ハーバード生7人到着
 - ・Welcome Party
- 2日目(11日)
- ・東京観光
浅草～原宿～渋谷
 - ・ハーバード生6人到着
- 3日目(12日)
- ・日本の元外交官による講演
 - ・新幹線にて大阪に移動
 - ・ATR 研究所訪問
 - ・新幹線にて京都に移動
 - ・京都にて宿泊
- 4日目(13日)
- ・京都観光
禅体験～龍安寺～金閣寺～清水寺
 - ・新幹線にて広島に移動
 - ・広島にて宿泊
- 5日目(14日)
- ・広島観光
広島平和記念博物館見学
原子爆弾に関する講演
宮島観光
 - ・夜行バスにて東京に移動
- 6日目(15日)
- ・東大工学部での講演、研究室訪問
 - ・ホームステイ
- 7日目(16日)
- ・アメリカ大使館への訪問
 - ・日本の現役外交官との昼食会
 - ・高校生との交流
 - ・寿司パーティー
- 8日目(17日)
- ・原発に関するRPGと議論
 - ・日米教育の座談会
 - ・Closing Ceremony
 - ・Farewell Party
- 9日目(18日)
- ・ハーバード生の帰国。

※東京に滞在中の宿泊施設は、東京大学駒場キャンパスの和館を使用した。

東京カンファレンス 2012 とは

カンファレンスとは、HCAP の理念である「将来に世界的な活躍が見込まれる米国のハーバード大学とアジア諸国の大学の学生たちが出会い、寝食を共にし、Academic(学術的)、Cultural(文化的)、Social(社会的)な体験を共有し、人的なネットワークを作り上げる」ための、一週間程度の交流プログラムである。東京カンファレンス 2012 は、東京大学の学生団体、HCAP 東京大学運営委員会6期の1年生16人が、日本にハーバード生13名を招いて行ったカンファレンスである。2012年3/10～3/18の9日間にわたって開催された。

HCAP では毎年異なった交流のテーマを定めている。本年度のテーマは、Technology and Social (In)Justice である。このテーマと、HCAP の根本理念で述べている学術的、文化的、社会的な要素を盛り込んで、カンファレンスは練り上げられる。

HCAP 東京大学運営委員会6期は、自分たちの興味・関心の高さを規準にして企画を選抜し、各人が興味を動機として高品質な企画を作り上げ、その総体が結果として何らかの価値を生み出すことを狙って東京カンファレンス 2012 を作り上げた。

以下では、その詳細について報告する。

各プログラム説明 (3月10日)

<Welcome Party>

ハーバード生が13人来る予定であったが、6人の到着が1日遅れたため予定を変更して、簡略化した。まず、各自が自己紹介をし、それに対しハーバード生は東大生に、東大生はハーバード生に質問しあう、という自己紹介をした。「なぜ東アジアの地域研究に興味を持ったのか」という質問から「ハリー・ポッターの中で好きな登場人物は誰か、それはなぜか」といった質問まで様々な質問が飛び交い、笑いのある和やかな雰囲気



に進んだ。その後アイスブレイキングのゲームとして、言葉の壁なく楽しめる「人間知恵の輪」というゲームを行った。自己紹介も含め予想以上に盛り上がり、カンファレンスへの期待が高まった。

～10日を振り返って～

ハーバード生は皆少し疲れているようであったが東京カンファレンスへの期待や最近の日米のニュース等について気さくに話してくれた。また、ほとんどのハーバード生にとってこれが初めての来日であったためか、東京都心の風景に驚く様子なども見られた。ハーバード生が興味の対象とするものや目新しく感じるものを当たり前だと感じてしまう自分の視点や思考の枠組みを改めて問い直し、見直すことができた。疲労もあり、この日は翌日に備えて早い就寝となったが、カンファレンス初日としては良いスタートを切ることができたと思う。



各プログラム説明（3月11日）

<東京観光>

1、企画内容

ハーバード生と東大生を混ぜたいくつかのグループに分かれ、浅草→原宿(明治神宮→竹下通り)→渋谷の順に観光してまわった。

浅草…浅草寺周辺散策、もんじゃ焼き

明治神宮…明治神宮散策

竹下通り…クレープ、プリクラ等

渋谷…散策、夕飯



2、企画目標

①ハーバード生と東大生が、日本の伝統文化やサブカルチャーを体感する中で、地域・時代など様々な面からの日米の文化比較できる機会を作ること。

②会話や共体験を通じ、東大生とハーバード生の交流の機会を作ること。

3、企画実状

浅草では浅草寺や仲見世通りを一通りめぐり、昼食として日本の伝統的ジャンクフードであるもんじゃ焼きを食べた。神仏習合の象徴である浅草寺では一か所で寺院と神社の双方を紹介することができ、ハーバード生も、寺院の荘厳さや神道の考え方をそれぞれ感じているようであった。もんじゃ焼きは、味も作る過程も楽しんでいた。

明治神宮は、その規模の大きさと、神社の鬱蒼とした静寂な空間にハーバード生も興味を抱いたようだった。竹下通りにおいては、クレープ・プリクラ・人混みなどをハーバード生に体感してもらい、日本のサブカルチャーの一端を見せることができた。

ハーバード生に日本文化を紹介するので精一杯となってしまう、比較という面についてこちらから明確に提示することができなかつた印象はあるが、随所で些細な文化の差異を体感してもらうことはできたように思う。

<Opening Ceremony>

東京カンファレンスの参加者全員がそろったところで、カンファレンスの幕開けとしてオープニングセレモニーを行った。自己紹介を行い、東大生が自身で作成したメンバー紹介ビデオを流すなど、積極的に打ち解けようとした。

ハーバード生の声

~ Beautiful day, first of many splendid temples, lovely street and the little eatery we went to was really cute ~



~ Asakusa was really cool to visit; definitely enjoyed it! ~

~ Seeing Harajuku was something I had looked forward to for a while; we hear so much about it from the States, so it was really cool to see it in real life! ~

~ I really like how we went there in the afternoon when there are tons of people. Ideally I'd like to spend another half an hour or an hour more to see other streets besides the main one. ~

~ 11日を振り返って ~

この日はフライトの都合で遅れてきたハーバード生とも合流し、全員がそろった日であった。そこで、ハーバード生みなに夜の渋谷を案内した。僕ら東大生にとってはなじみの深い渋谷の街であるが、ハーバード生にとっては夜でも街全体が明るく、にぎやかであることが驚きであったようで、各地で写真をとっていた。

ハーバード生の声

~The ambassador said some very valuable things. It was nice to get his insight on things and to hear what he had to say from a Japanese perspective.

Also, his historical overview was a great intro for the rest of the trip. It put things into perspective and gave us a great general context to build off of.~



~This was a unique opportunity I'm not sure I'll ever have again; seeing the development of the Geminoids and Telenoids in person was fascinating.~



~12日を振り返って~

この日はハーバード生にとって新鮮な体験が2つあったようであった。1つ目は京都まで移動した際に使用した新幹線である。速度、乗り心地の良さとともに満足していたようであった。2つ目がこの日のプログラムを終えた後に宿泊した仁和寺での体験である。仁和寺の大きさに驚きながらも和風な作りを味わっており、夜は大広間にてハーバード生、東大生ともに集まり、消灯時間近くまで、談笑していた。

各プログラム説明（3月12日）

<日本の元外交官による講演>

1. 企画内容

カナダ大使のほか、在日アメリカ大使館での安全保障等のご担当や、北米局安全保障課長、北米第一課長、沖縄担当大使等を務められた、豊富な外交経験を持たれる沼田貞昭大使による、日米関係に関する御講演。

2. 企画目標

“Whither Japan-U.S. Alliance? A Personal Narrative”というタイトルのもと、沼田大使に御講演いただくことで

- ① 将来、日米関係に直接的な対話を行う実務者たり得る HCAP 参加者が、日米関係の重要性を再確認し、知見を深める機会を創出すること。
- ② 3月16日のアメリカ大使館訪問と合わせることで、日米関係に直接影響を与えて来られた日米双方の外交官の方々よりお話を伺うことができ、日米外交官方のスタンスの類似性・違いを見出すことができる。それによりハーバード生・東京大学生が、相手国が自国との外交関係を如何に捉えているかを知ることで、相互理解を促進すること。
- ③ 将来私たちの実務的または直接的な対話における関わり方に役立つヒントを得ること。

以上3点を達成し、日米の私たちは将来如何に関わり合うべきか、考える契機にすること。

3. 企画実状

沼田大使は、まず、41年間の外交官人生の経験を通して、外交官として直接的対話に不可欠な要素が「言葉」(“words”)と「機会」(“opportunities”)である、とおっしゃる等、外交に取り組む上で大切な姿勢を伝えて下さった。その後、日米外交史上の協力関係・摩擦関係、及び双方の状況の推移を中心に、日米関係史を俯瞰した。また、将来の日米関係のあり方、そして、日本が国際社会に如何に貢献し得るかについても伺った。最後には、グローバル社会に生きる若者である私たちを激励して下さった。今後の日米関係の課題と可能性を認識すると同時に、将来の日本の世界との関わり方や理想的リーダー像について具体的に思考する視点を得ることができた。ハーバード生からは、日米関係を考える上で必要な、多くの歴史背景的知識が得られた、アメリカの教科書では日本と必ずしも関連付けられていなかった国際政治諸分野における日米の関わり方を理解できた、日本側の視点を学べた、という声が聞かれ、目標は達成されたと考える。

<ATR 研究所訪問>

1. 企画内容

国際電気通信基礎技術研究所 (ATR, Advanced Telecommunications Research Institute International) を訪問し、実在の人間に酷似した遠隔操作ロボット Geminoid と、テレビ電話のように操作者の存在感を遠隔地に伝えるロボット Telenoid を見学し、その開発者である石黒浩教授にお話を伺う。



2. 企画目標

日米は共にロボット大国として知られているが、米国が軍事技術中心に開発が進められていることに対し、日本では人型ロボットや、ペット型ロボットなど、人とのコミュニケーションを主眼に置いた、「如何に人と関わるか」「如何に人に近づけるか」をテーマに開発されるロボットが多い。そうしたロボットの中でも、特に日本独自で興味深いと言える、Geminoid と、Telenoid を見学し、その開発者である石黒浩教授にお話を伺うことで、ロボット技術が発達し、「人」と「人ならざるもの」の境界が曖昧になってゆくことへの是非を考える。

3. 企画実状

Geminoid・Telenoid の見学・質疑応答だけでなく、実際にロボットを操作し、モニターを通じて人と交流する体験もでき、参加学生全員がその奇妙な感覚に驚きつつも楽しんでいった。ハーバード生の中には人間性を考える端緒になった、と後々述べる人もいた。このようにハーバード生・東大生共に最先端ロボットを体験する興味深い経験ができた。ただし、時間が限られていたこともあるが、ロボット体験にとらわれ、目標としていた「人」と「人ならざるもの」の境界が曖昧になってゆくことへの是非等の会話ができなかった。



各プログラム説明（3月13日）

〈京都観光〉

1、企画内容

妙心寺にて禅体験の後、龍安寺、金閣寺、清水寺の散策。

2、企画目標

日本の伝統文化の代表である京都の魅力をハーバード生に伝えること。

3、企画実状

妙心寺には英語のできる方が

いたため、英語での禅のレクチャーをして頂いた。その後、禅体験をし、日本文化の深く難しいところを感じようとした。難解ではあったものの、ハーバード生はみな集中して禅体験に臨んでいた。龍安寺の石庭は、ハーバード生に理解してもらうのは難しかったようでもあった。金閣寺参詣は、ハーバード生に感動を与えられた。

最後の清水寺では、清水の舞台からの京都を一望し、京都という町をその空気の中で感じてもらうことができた。帰りの清水寺前の道では存分に買い物を楽しんでもらうことができた。

～13日を振り返って～

この日は、禅体験から始まり文化体験に焦点を置いた京都観光を行った。ハーバード生は各々が、寺社や食べ物、京都の町の雰囲気などを楽しんだようである。ハーバード生の中には寺社の建物に感銘を受けた者もいれば庭園に感銘を受けた者もいた。文化的背景が異なる人間が日本の文化に示す反応を知ることは、6期各人にとっても大変興味深いものであった。

また、寺同士の間での移動時間や境内の散策時間が長かったため、ハーバード生と東大生が、学生生活や自国の文化・将来など多様な話題に関して、じっくりと話を深める機会を得られた。



ハーバード生の声

～ The temple and the bathhouse were wonderful! Very fun and very relaxing.～



～ Meditating was a nice, relaxing experience. I had a great time getting to experience it all and here about the perspectives from the master.～

～ Didn't really understand the Zen garden.～

～ Ryoan-ji Temple was beautiful and extremely peaceful – it was a lovely place to walk around.～



～ Walking up to Kiyomizu-dera and trying all of the snacks was wonderful! Everything was so delicious! The temple itself was also quite interesting; definitely worth it.～

ハーバード生の声

~This was one of the more memorable parts of the trip for me. Visiting helped broaden my perspective a great deal, and it was overall a very moving experience.~



~ Mr. Leeper was very knowledgeable, answered our questions very thoroughly, and was quite interesting to listen to. Though I may not agree with everything he has to say, he was a good speaker regardless.~



~Okonomiyaki was so delicious! I miss it!



~My definitely highlight of the trip. I thought Miyajima was spectacular (the Torii in the water was so beautiful) and it was great to walk around, try food, and interact with our group.~

各プログラム説明（3月14日）

＜広島～原爆に関する講演～＞

1、企画内容

原爆ドーム・広島平和記念公園の散策、広島平和記念資料館の見学、広島平和文化センター理事長スティーブン・リーパー氏との座談会。

2、企画目標

原爆投下という日本とアメリカに深く関係する出来事について東大生、ハーバード生双方に知見を深めてもらい、将来における平和を考察してもらうとともに、主流となる意見が日米間で大きく異なる原爆投下に関する議論をすることで相互理解を図る。また、今年度のテーマ Technology and Social (In)Justice を考える上で、原子力という技術の脅威を知る材料として提供し、この点についても議論する。

3、企画実状

広島での展示、そこで起こった歴史的事実に対して驚嘆する声が聞け、反応は良かった。リーパー氏は資料館見学の感想、各国の歴史教育、過去の世代の成した事への責任、今後の世界の核兵器にまつわる指針などを話してくださり、リーパー氏との座談会は質問が途切れることなく、有意義な会となった。ただし日米の意見の相違や、原子力という技術の産物としての原爆という捉え方はできなかった。

＜広島～宮島観光～＞

1、企画内容

宮島にて、厳島神社を参詣し、その後宮島散策。

2、企画目標

ハーバード生に厳島神社の伝統的な日本の美的感覚を感じてもらう。また宮島を探索し、観光する。

3、企画実状

宮島では少ない時間の中で東大生、ハーバード生が散策を楽しんでいた。共に美しい場所に行き、美味しいものを食べるという経験は、両学生の共通の思い出になった。

～14日を振り返って～

平和記念資料館では、想像以上に丁寧に、一つ一つじっくりと展示を見て回るハーバード生が多かった。後のスティーヴン・リーパー氏との座談会の発言で再確認できたのだが、そこでハーバード生が感じた思いは、どこか原爆ドーム前で我々東大生側が感じたものに似た、「自分と通じるが自分ではない存在」への思い、世代や、国民や、国籍といった、幅広い概念の中にある自己の罪の意識、居心地の悪さだったという。また中国や他アジア諸地域をルーツとするハーバード生も多く、彼らにとってもまた複雑な立ち位置から戦争について考えるきっかけとなったようだった。

この日の昼食はお好み焼きで、覚えてたの日本語を店のオーナーに披露するハーバード生の姿も見られ、一転して和気あいあいと楽しんだ。それに連なる宮島観光は好評であり、カンファレンス最終日にハーバード生に一番印象に残った日本の食べ物を探ねたところ、「もみじまんじゅう！」という答えが返ってきたほどである。



各プログラム説明（3月15日）

〈東大工学部での講演、研究室訪問〉

1、企画内容

東京大学工学部の、北森武彦 工学部長、金子成彦 教授、落合秀也 助教、によるレクチャーと、研究室訪問。

2、企画目標

- ① 科学(技術)はこれからどこに向かおうとしているのか
- ② 科学(技術)に関連して、現在どのような問題があるか。
- ③ 将来生起しうる問題は何か
- ④ 現在最先端で科学(技術)を牽引されている方々は、どのような思いをお持ちなのか等に関する情報を得ることで「よりよい社会のために、未来の我々はどう行動すべきか」について考える。

3、企画実状

ハーバード生には事前知識がなかった為に、話についていくのが難しかったと思われる。研究室訪問では手作りの実験機械を見学し、興味を持ったハーバード生と興味を持たないハーバード生に分かれた。

〈ホームステイ〉

ハーバード生と東大生 1 人ずつで組まれたペアで、東大生の家に泊まり、ホームステイを楽しんだ。日本の家庭のおもてなしや日常生活に感銘を受けたハーバード生も多いようで、大変好評だった。ハーバード生との交流をより一層深めることができ、また、自由時間が大きくとれたためにハーバード生は様々なことが体験できたようである。

～15日を振り返って～

広島から夜行バスで帰ってきたために疲れの残ったような表情の人が多かった。しかし、本郷キャンパスの安田講堂の前で撮った全体写真は生き生きとしており、このカンファレンスに残る、思い出の写真となっている。

ハーバード生の声

～Exploring the lab and listening to these two professors was quite cool – really fascinating to see in person!～



～Seeing the biomass power generator in person was quite cool; I'd like to learn more about them in the future.～



～An extremely exciting part of the Tokyo trip: All of us had wonderful, unique experience with different family members, friends, or other Tokyo delegation members, whether it was talking about our experiences while eating delectable home-cooked meals, or exploring parts of Tokyo such as Akihabara, Shibuya, and Ikebukuro.～

ハーバード生の声

～ Talking with our diplomat at the Sasakawa Peace Foundation was really great; he had a really interesting background, he knew a great deal about contemporary politics, and he was just a very nice guy overall.～



各プログラム説明（3月16日）

<アメリカ大使館訪問>

1.企画内容

在日アメリカ大使館における、担当官の方々からの日米関係に関するブリーフィング。

2.企画目標

沼田貞昭大使御講演会同様、将来日米関係に直接的対話を通して関わり得る若者として、日米関係の重要性再確認・知見深化を目指す。そのための取り組みとして、日米双方の視点から日米関係の変遷と将来的課題・可能性を伺い、日米関係に対するハーバード生・東大生相互の理解を促進することを目標とする。本企画はそれを達成すべく、主にアメリカ側のスタンスを中心に据える。同時に、日米関係に直接携われた外交官の方のお話から、将来私たちが直接相手国の人と対話する上でのヒントを得ることを目指す。以上を元に、日米の若者として将来如何に関わり合うべきか、思考することを心がける。

3.企画実状

米国大使館の広報・文化交流部、政治部、大使執務室、経済部、領事部等の担当官の皆様から、各部署で行なっている業務、及び二国間の課題を中心に30分程度お話を伺った。その後、ハーバード生、東京大学生、及び同席していた別団体の米国大学生からは、個別の社会問題や外交政策形成方法について等、スピーカーの皆様の日米外交の経験に鑑みた多くの質問が寄せられ、活発な議論が行われた。日米関係自体の知識、また、政策立案や各政策分野等米側のアプローチについての知識を得るだけでなく、直接対話の活かし方を学ぶ等、企画目標に沿って考えを深める機会になった。

<笹川平和財団での昼食会>

1.企画内容

笹川平和財団にて、外務省北川伸太郎様、高尾学様、神奈川大学佐橋亮様をお招きし、ゲストの方々、ハーバード生、東大生混合の小グループに分かれ、ディスカッションや外交官、教授の方々への質問をする。

2.企画目標

当企画の前に、沼田大使によるご講演とアメリカ大使館訪問を通し日米関係の全体像について学ぶと共に、広島各関連施設訪問を通し、軍事力、平和のあり方について考察した。これら一連の企画の中で育んできた、日米関係についての自分の意見をアウトプットする機会として当企画を位置づけ、「未来における」日米関係をどう考えるか、という視点を大切にしながら、一連の日米関係関連企画の総まとめとする。

3.企画実状

3 グループに分かれ、ゲストの方の司会進行のもと、日米関係についてのざっくりとした話をした。話した内容の一例として、「日米関係は今後、どのような意味を持つか」「中国が軍事力でアメリカを超越するか、またそうしたら世界のバランスはどうなるか」などがあり、当初の目標通り、主に未来を視野に入れた話がなされた。ゲストの方からのお話、及び、ゲストの方の司会のもとでハーバード生と交わした意見から、両学生とも新たな知見や、難しい問題を考えるきっかけを得た。また、東大生にとって近い未来の日米関係を担う若い方々と話せたことは、自分達の将来を想像する上で大きな助けとなった。

〈高校生との交流〉

1.企画内容

ハーバード生、6期、高校生の3者でレクチャー、スピーチ、ディスカッションを行う。

第1部 東大生、ハーバード生によるスピーチ

第2部 ハーバード生によるレクチャー

第3部 3者間でのディスカッション

2.企画目標

ハーバード生と日本の高校生との交流を目標とする。また、高校生にハーバード生から海外の情報を与えることで、海外に対する刺激を与えられる機会を作る。

3.企画実状

全体的に盛り上がっていた印象があった。スピーチは内容が4者4様であったことから高校生が飽きずに耳を傾かせていた。ハーバード生によるレクチャーは高校の授業では学ばないような分野の導入講義形式であったので高校生の興味をひくものであった。また、今回来場していた高校生は海外の大学を目指す人が大半であったため、ハーバード生によるレクチャーはさらに彼らのモチベーションを向上させたであろう。ディスカッションではハーバード生や東大生の手助けのもと、高校生が話し合ったことを模造紙にまとめ、発表の段階まできちんと仕上げているため、短い時間ではあったが、高校生にとって有意義であったらう。

〈寿司パーティー〉

1.企画内容

HCAP 東京大学運営委員会のOB・OGを交え、ハーバード生と6期各位が、一緒に手巻き寿司を作り、食す。

2.企画目標

ハーバード生に、寿司という日本食の代表格を自ら作って食してもらう。

ハーバード生と6期各位、HCAP 東京大学運営委員会のOB・OGが食事を楽しみながら、親睦を深める。

3.企画実状

自分で寿司を巻いて食べることにハーバード生はすぐに慣れ、いろんな寿司ネタを楽しんでいた。また、ハーバード生や6期、OB・OGが、打ち解けた雰囲気の中で様々な会話をし、交流を楽しんでいた。

各プログラム説明（3月17日）

〈原発に関するRPGと議論〉

1.企画内容

「科学にかかわる情報伝達のあり方」をテーマに、原子力発電を使用するにあたって「(科学者、政府、市民の間で)どのように情報をコミュニケーションしていくか」を考える。まず東大生による原子力発電所の孕む、地域格差や放射性廃棄物の問題についての簡単なプレゼンをする。その後、福島第一原発事故後の情報伝達の問題点を提起する資料を基に、ロールプレイング形式による2回のグループディスカッション、及びディスカッション後ごとに各グループより短い意見の発表を行う。

2.企画目標

昨年の東北での大地震により、原子力発電の是非を問う議論が盛んになった。それに伴い、今年のHCAPのテーマであるTechnology and Social (In)Justiceを議論する上で原子力発電の問題を扱うこととした。今回はテーマの中でも「科学にかかわる情報伝達のあり方」を議論するため政府や科学者と市民の間での情報伝達の難しさに注目した。それにより原発がもたらした社会への不安をもとに、科学の情報への接し方を、臨場感をもって考えさせるのが、今回のロールプレイング形式の議論の目的である。

3.企画実状

まず、原子力発電所の孕む、地域格差や放射性廃棄物の問題について東大生側からレクチャーを行った。その後東大生とハーバード生混合のいくつかのグループに分かれ、各グループを、対応の意思決定者である政府サイド、専門知識を基に事象の研究と予測を行う専門家サイドに割り振り、福島第一原子力発電所での事故における放射性物質のデータを公開するか否かに関して、ロールプレイング形式にてグループ間で議論を行なった。次に政府や専門家から情報を受け取り、行動を選択する大多数の人々である市民サイドでのディスカッションをした。東大生、ハーバード生共に議論に積極的で、発表の際に出てきた内容は各グループとも多様であった。しかし、時間がなかったことや、事前知識の不足が反省点として考えられた。

ハーバード生の声

~This was fantastic; the high school students were so well-spoken, so intelligent, and so much fun to discuss with. This was a highlight of the program.

~



~Hand-made sushi was so delicious!~

~16日を振り返って~

朝から夕方まで学術的な議論が多い日であったが、中身が興味深く、参加者は積極的に議論に参加しており、高校生との交流が終わる頃には自然と全体が高揚した雰囲気となっていた。夜の寿司パーティーまでその雰囲気が続き、和やかな雰囲気での交流ができた。その後ハーバード生が築地を見学したいという希望を持っていることが分かったため、翌朝早朝に築地に行くことになり、早めの就寝となった。

ハーバード生の声

~This was extremely well organized and I only wish we had more time to talk with the Tokyo delegates about the reason for their distinctively different opinions, especially with regards to how the Fukushima incident was handled by the Japanese government.~

ハーバード生の声



～ Dr. Masako Egawa is extremely articulate, very well-versed in the subject matter, and gave very clear and direct answers. Great speaker.～



～17日を振り返って～

ハーバード生の帰国前日ということで、少ししんみりとした雰囲気のある日であった。東大生からは、集合写真の入った団扇をお土産としてハーバード生全員にくばり、ハーバード生からはアメリカのお菓子をもらったが、中にはハーバード大学のロゴ入りのパーカーをもらった東大生もいた。昼食はハーバード生が自主的に和館の中にある机を移動させて、四角形にし、全員が輪になって、昼食の弁当を食べられるようにするなど、出来る限り語り合おうとした。

<日米教育の座談会>

1、企画内容

東京大学教養学部を卒業し、ハーバード大学ビジネススクールにて MBA を取得している、東京大学の江川雅子理事との、日本と米国での教育に関する座談会。

2、企画目標

江川理事に、1980年代と2010年代、日本と米国、東大とハーバード大学という3つの軸を元に、教育者の視点から講演をしていただく。講演していただいた内容を踏まえて、江川理事とハーバード生、6期が座談会を行う。それにより、東大生、ハーバード生共に国や時代の違ったところでの教育状態などの知見を深めることを目標とした。

3、企画実状

江川理事には、日本とアメリカの教育に関する文化の違いを、アメリカの教育を支持する立場から語っていただいた。具体的には、アメリカの教育の方が多様性に富む、日本では受動的な暗記学習が主流だがアメリカでは自分なりの答えを考える能動的な学習が盛んだ、日本では議論において空気を読むことが重視されるがアメリカでは論理的な見解のやりとりが重視される、日本の学生は課外活動の時間で勉強に時間を費やすがアメリカの学生はアルバイトなどで多様な経験をする、といったことをおっしゃっていた。教育者の視点から日本とアメリカの違いを語っていただく狙いは達成された。

座談会においては、ハーバード生と東大生の双方から江川理事へ積極的に質問が行われ、座談会としての盛り上がりを見せた。1980年代と2010年代、日本と米国、東京大学とハーバード大学という3つの軸の通りの運びとなった。

<Closing Ceremony>

カンファレンスの締めくくりとしてふさわしい場を提供するために、カンファレンス中の写真を集めて、音楽とともに流す動画を見せることでカンファレンスを振り返り、その後皆で一人ずつ感想を述べていった。すべての感想を出し尽くすには時間が多少足りなかったが、カンファレンス中の思い出がよみがえり、涙を流す東大生・ハーバード生もあり、感動的な終幕を迎えられた。

<Farewell Party>

東京カンファレンスの締めくくりとして、渋谷にてカラオケパーティーを行った。日本発祥のカラオケ文化を日本が誇るハイクオリティな設備で楽しんでもらうこと、また、日本の若者がどのように盛り上がるかなどを見てもらうことも意図した。音楽による一体感を感じたことで、言語による会話以外にもコミュニケーションの手段は多くあるということを感じた。

各プログラム説明（3月18日）

最終日は自分たちの宿泊施設であった和館の清掃を行った後に、ほぼ全ての東大生が成田空港へハーバード生の見送りに出かけた。成田空港へ向かう電車の中では、寝る人もいれば最後の会話を楽しむ人もいた。さびしげな顔をしている人もいたが、皆満足そうな顔をしているように思われた。ハーバード生は東京にこれてよかった、東京カンファレンスでのことは忘れない、などと口々に言ってくれ、東大生も嬉しそうであった。10日間にも満たないカンファレンスではあったが、東大生とハーバード生との絆は確かに出来ていた。

カンファレンス総括

ここでは、東京カンファレンス 2012 の全体を振り返ります。

ハーバード大学の学生団体である本部が掲げる HCAP、ハーバード大学とアジア諸国の大学の学生による交流プログラムの目標は、「将来に世界的な活躍が見込まれる米国とアジア諸国の学生たちが出会い、寝食を共にし、学術的、文化的、社会的な体験を共有し、人的なネットワークを作り上げる」ことにあります。HCAP 東京大学運営委員会6期は、その HCAP の価値を最大限に生かそうと、上記のような種々の企画を練り上げ、実行しました。

東京カンファレンス 2012 の学術的な企画は、「Technology & Social (In)Justice」「日米の外交」「日米の教育」に関するものの3種類に大別されます。

まず、上記3つのうち1つ目について振り返っていきます。該当する企画は、〈ATR 研究所訪問〉〈広島～原爆に関する講演～〉〈東大工学部での講演、研究室訪問〉〈原発に関する RPG と議論〉の4つです。これらの企画では、生命倫理や情報倫理、社会への有用性といった視点からハーバード生と6期各人が技術への知見を深め、議論を深化させられるような機会を提供することを目指しました。企画の選定は、6期各人の興味・関心の高さを元に行いました。それぞれの企画後には、参加者がある程度の知見を獲得できた様子が散見されました。一方で、6期が、議論の時間を十分に確保しておらず、また議論の目標設定を上手くできていなかったことで、ハーバード生との議論を、単なる意見表明以上の機会にすることを、それほど出来ませんでした。また、企画同士の関係性が薄く、企画群としての価値を、あまり大きく出来ませんでした。

次に、「日米の外交」と「日米の教育」に関する企画群について振り返っていきます。該当する企画は、〈日本の外交官による講演〉〈アメリカ大使館への訪問〉〈笹川平和財団での昼食会〉の3つと、〈日米教育の座談会〉です。これらの企画群においては、日本と米国の両者が興味関心を共有でき、両国の人間の考え方の共通部分と差異をあぶり出せる日米の外交と、教育について、知見を深める機会を提供することを目指しました。結果として、外交に関しては、参加者が日米それぞれの外交担当者から、日米関係の基礎知識と、実務者としての見解を伺う機会を提供できました。教育についても、参加者が江川雅子東京大学理事との座談会によって、日本と米国の教育の相違について知見を深める機会をできました。

総じて6期は、学術的な企画を、様々な分野に関する知見を得る有益な機会として提供できました。しかし、得た知見を生かしてハーバード生と東大生が議論を深め、互いの考え方の相違について思考を深めるといった段階まで企画を高めることが出来ませんでした。6期は、HCAP 東京大学運営委員会の来期以降には、単なる知見獲得以上の価値を、企画として生み出すことを求めていく所存です。

東京カンファレンス 2012 の文化的な企画は、「ハーバード生に、6期各人が愛着を持つ日本の文化的側面を紹介する」という狙いの元に練り上げられました。該当するのは、〈東京観光〉〈京都観光〉〈広島～宮島観光～〉の3企画です。これらの企画群に関しては、ハーバード生の興味・関心が非常に高く、企画後のハーバード生の評判は上々でした。しかし、個々の企画を振り返ると、企画内の体験にあまり脈絡がなく、6期は、体験の総体からハーバード生に価値を提供することが、ほとんど出来ませんでした。また同様に、3つの周遊都市の総体としての価値を描くことも出来ませんでした。HCAP 東京大学運営委員会の来期以降の人間には、様々な文化的側面の紹介の総体によって、単純な見た目の物珍しさ以上に、知的好奇心をそそるような要素がもたらされた企画を参加者に提供しよう望みます。

東京カンファレンス 2012 の社会的な企画に該当するのは、〈Welcome Party〉〈Opening Ceremony〉〈ホームステイ〉〈高校生との交流〉〈寿司パーティー〉〈Closing Ceremony〉〈Farewell Party〉の8企画です。社会的な企画とは、「参加者が他者との新たな出会いを得て、その関係性を深めるための企画」と換言できます。上記のような企画の意義を、ハーバード生と6期、また高校生は実現できていたように思われます。

企画の振り返りが終わったところで、企画の合間に存在した時間について振り返っていきます。カンファレンス概要にもあるように、東京カンファレンスでは、約1週間にわたってハーバード生と6期各人が、常に場所・時間・行動を共有しました。その中では、ハーバード生と6期各人が、企画で得た知見や体験を生かして個人的に議論を行ったり、社会問題から日々の生活に至るまで様々な話を行ったりして、仲が深まっていく様子が見られました。一方で、公共の場での日米の日常的慣習の違いや、議論の仕方の違いから、ハーバード生と6期各人が互いに戸惑いを覚える様子も見られました。同様の様子が、ハーバード生や6期各人それぞれの中の人間同士でも起きていました。そうした様々なやり取りの結果として、カンファレンスが終了した今、ハーバード生と6期各人が、個人的なメールや Facebook のコメントのやり取りが出来る程度の仲を作り上げられたように見受けられます。

以上の振り返りより、東京カンファレンス 2012 は、HCAP の目標をある程度達成できたようなプログラムであったと言う点で評価できます。しかし、一方でカンファレンスの全体を通して見える未熟な部分が、以下の2点に存在します。総括の最後に、その2点について論じていきます。

一つ目は、参加者が企画ごとの体験を咀嚼し、共有して議論する時間が不足していた点です。それは、企画を一つでも多く盛り込んで、カンファレンスを多様な体験を出来る場にしようとした結果です。また、都市の周遊に関する移動時間がかさんだことも、咀嚼の時間不足の一因です。咀嚼の時間がもっと取れていれば、単純に知見を深める以上の、より踏み込んだ学術的な体験や文化的な体験をハーバード生と6期各人が共有できたと予想されます。後輩がカンファレンスを企画する際には、そうした咀嚼の時間を十分に取るよう望みます。

二つ目は、複数の企画の体験を通して得られる価値を、作りあげられなかった点です。6期は、自分たちの興味・関心の高さを規準にして企画を選ばし、各人が興味を動機として高品質な企画を作り上げ、その総体が結果として何らかの価値を生み出すことを狙って、東京カンファレンス 2012 を作り上げました。しかし、最終的に出来上がったカンファレンスは、企画ごとの関係性が弱いオムニバスなものであり、かつ企画の中でも、体験のとりとめのなさが見受けられました。これらは、6期が組織として、カンファレンスという一つの価値を作り上げる姿勢に乏しかったからであると分析します。後輩には、組織として、体験の総体という観点においても何らかの価値を提供できるような、より高品質なカンファレンス作りを求める所存です。